

子と手と手

岡山発 国際貢献

暮れも押し詰まった一昨年十二月三十日。大阪市在住の金山夏子(五七)は、女友達と二人出掛けたベトナム料理店で携帯電話を受けた。国際医療ボランティアAMDA本部(岡山市楠津)からだった。「インドネシアのバンダアチエに行けますか」。四日前に起きたスマトラ沖地震の被災支援の要請だった。

AMDAの本部事務所は、岡山市街地を北西に外れた一角、代表の菅波茂(五七)が経営する医院の中にある。そう広くもないありふれた構えのスペースだが、ここが世界を舞台に活動する医療NGO(非政府組織)の司令塔だ。いったん、事が起これば、スタッフ数人が集い、緊張が走る。

そのときもそうだった。二十九ある国外支部のうち、被災地に関係のあるインドネシア支部など医療スタッフ派遣について連絡を取る一方で、日本国内からの派遣者も募らなければならぬ。

調整員

本部のパソコンには、百人以上の医師や看護師、調整員が登録されている。派遣者は一斉にメールを送って募る。

が、金山の場合は少し事情が違い、本部直接の指名だった。バンダアチエは内戦の地でもあるので、そのことに理解が及ぶだけの専門性が求められ、白羽の矢が立った。

紛争解決

金山はアフリカ・ウガンダの大学院に在籍していた時、AMDAに現地情報を報告したりして関係を築いていた。帰国後、大阪大学院国際公共政策研究科へ進んだ。専門は国際政治、それも紛争解決だった。願ってもない現場。

要請を好機ととらえ、快諾した。大学院とアルバイト先に三週間の休みをもらった。大阪をたったのは昨年一月三日だった。

現地事業統括の肩書。仕事

あふれる遺体。ヘリが飛



避難所の子どもたちに囲まれる金山(左上)。子どもたちは、AMDAのスタッフが来るのを楽しみに待っている。インドネシア・アチエ

び交い、装甲車が街を走る。慌ただしさと惨状と。そこには宿舎もなく、活動拠点の病院二階の廊下が寝る場所。寝袋で二カ月過ごした。

医師や看護師ではないから医療行為で人は救えない。「緊急救援の場では足手まといではないか」と感じたこともある。

それでも「何か手を貸したい」との気持ちが勝った。「必要なものを届けることならできる」

金山を勇気づけたのは、復興支援プロジェクトの実施先で出会う被災者の笑顔だった。「彼らは私たちの支援を必要としている」。習い覚えた片言のインドネシア語で話を聞く度に実感できた。

現場学

バンダアチエで立ち上げ

たプロジェクトの成果は研究論文として書くつもりだ。国連職員を夢見る金山は、「現場学」を身につけてそれを引き寄せようともしている。

緊急救援が終わった昨年四月から復興に関する現地調査を開始。地元の意見やニーズを自分の目で確かめて支援プロジェクトを行う手法に徹することが重要だと学んだ。ニーズを基に行ったプロジェクトは例えば、本が流されているので子どものための移動図書館であるとか、感染症予防に住民に対する保健衛生教育であるとか…。地元スタッフに役目をこなしている。

「自分の力は小さい。でも、スタッフ全員だと、大きな力が発揮できる」。今、楽しくてしかたない。活動予定は今年八月まで。三週間のはずが、自ら望んで延長を重ね、一年が過ぎた。(敬称略)

地元ニーズに徹する